

## 保育計画成果報告書

法人名	特定非営利活動法人 Luce
施設名	Luce 陽だまりの家保育園綱島
報告者（役職）	高木文音（園長）
住所・連絡先	神奈川県横浜市港北区綱島東 4-9-28 エアリーハイツ 1F
	☎ 045-718-6466
	E-mail tsunashima@luce.or.jp

### ○タイトル（保育計画）

とことん遊びこめる、自由自在のお部屋

### ○主な助成備品

柵、絵本、マット、戸板、梯子、創作木製遊具

## 1. 保育計画策定の目的

保育園の建物が元は個人宅であったため、生活をするという点では子どもたちが安心して過ごしやすい環境といえましたが、逆に保育するための建物ではないがゆえに集団での生活の流れを考えると工夫を要する点がありました。子どもたちとの生活を組み立てるにあたり、なるべく大人の制止を減らせるよう、子どもたち自身が生活の見通しを持てるような流れを作りたいと思いました。

また思う存分に身体を楽しく動かして遊び、そして絵本が大好きな子どもたちにいろんな絵本を読んであげる時間をたくさん子どもたちと持ちたいと思いました。

## 2. 具体的な実施内容

### 「区切ることのできる部屋」

区切りのない、一続きの部屋の三か所を可動式の向こう側の見通せる柵で区切りました。可動式のためその用途に応じて開閉することができます。柱状の柵のため区切った部屋の向こう側が見通せます。そのため年齢に応じて活動の部屋を柵で区切っても、隣でどんなことをしているのか感じることができます。また2歳児は自分で柵を乗り越えることもできます。それは自制のできる2歳児だからこそ、むやみに超えず、そして超えてもいいときにかっこよく超えていく姿に下のクラスの子



もたちは憧れます。

### 「絵本」

生活の中のいろんな時間や季節や行事に合わせて、いろんな絵本を読んであげることができました。子どもたちの絵本を見る目はいつも真剣です。その世界をもとにしていろんな遊びをすることができます。



### 「戸板、マット、梯子」

0歳～2歳という低年齢の子どもたちにとって園庭がなく、身体を動かすには離れた公園までいかないと遊ばない、ということはとても大変なことです。しかし今回助成して頂いた戸板やマット、創作遊具の丘に机を加え、これらを組み合わせることでお部屋に変幻自在なアスレチックを作ることができます。月齢やその子ども達、また遊びによって高さや形を変えます。そしてさらに忍者ごっこなど、それらに想像力をプラスしてわくわくできるように楽しんでいます。



### 「創作遊具」

まだ歩くことのできない0歳の子どもたちもこの緩やかな丘は好奇心をもって登ってみることができます。0歳の子に取ってみたら丘の頂上からの景色はちょっとした冒険です。降りる時も前から降りるか後ろから降りるか、一つ一つがわくわく、どきどきです。1歳や2歳はその丘を歩いてまたは走るように、上り、降りる時もジャンプしたりと様々な楽しみ方をします。

### 3. その成果と評価

今回、部屋を可動式の柵で区切ることができて、子どもたちの生活の流れを整理することができました。一人一人の発達を丁寧にみて、その子に応じた遊び、保育空間を確保することができました。大人の制止が減り、子どもたちに生活の見通しを持ってもらうことにつながりました。それはつまり子どもたちの自主性を育むこととなります。また2歳児は柵を自分で超えられるので、それを2歳児だけの一つの遊びと捉え、2歳児に自尊心を高めると共に1歳児の子どもたちが2歳児に憧れを持つ一つのきっかけとなりました。

部屋では戸板やマットなどでアスレチックを作ることにより、天気を問わず、また頻繁に身体を動かす機会を持てるようになりました。手や足、感覚を使い、上り下り、くぐって、ジャンプ、など楽しみながら身体作りをできるようになりました。

いい絵本にもたくさん出会い、たくさん読み聞かせをすることができました。その絵本の世界は本を飛び出し、時には外に出て、単なる山やそこに生えている葉一枚に絵本の世界に力を借りて想像力を膨らませながら遊ぶことが出来ました。単なるアスレチックも子どもたちの想像力の中ではいろんな物語を生み出してくれます。絵本の力をかりて子どもたちと想像のなかで、いろんなものになりきるワクワクした遊びへと遊びの幅を広げる事が出来ました。

### 4. 今後の課題と展望

私たちは小規模の保育園だからこそ一人ひとりを大事にしながら生活をしていきたいと思って子どもたちと保育をしています。柵の開閉で子どもたちの行動をコントロールし、生活の流れを組み立てることはできます。しかしそれだけでは本当の意味で子どもたちの自主性を大切にしたい生活の流れを組み立てることはできないです。柵の向こう側の空気を感ずることを大切にしながら、ときには憧れを持ちながら見て、時には柵の向こうで寝ている0歳の子を気遣いながら人と生活をしていくには大人の工夫や想像力が必要です。空間を分けて生活することをさらに生かせるように常に大人は引き出しをたくさん持ち工夫していくことが大切だと思います。

同様に子どもたちは基本的には上ったり、降りたりすることが好きです。しかし、ただ部屋に戸板などを使ったアスレチックがあるから子どもたちが楽しんでやるわけではないのです。その遊びをするときにいかに子どもたちとわくわくして過ごせるかは大人の想像力が必要です。

物に頼り過ぎず常にもっと楽しく、もっとワクワクできるようにと、大人の「もっと」を大切に、目の前の子ども達に合わせながら過ごしていきたいです。

以上